

III 中学部の実践

散歩への取り組み ～たかが散歩 されど散歩～

1. 研究の概要

(1) 散歩のとらえ方・考え方

学校での散歩とはどんなものなのだろうか。今年度の研究に中学部はその散歩を取り上げた。学校行事の中で遠足や社会見学 校外学習などの形で教室の外に出かけることはしばしばある。しかし その目的は体力の向上であったり 美術鑑賞や工場見学であったりと教師の教育的意図が前面に出ていることが多い。もちろん そういったことも必要なことではあるが 子どもにとって外に出かけるということは もっとわくわくしたりドキドキしたりするものではないだろうか。そのわくわく ドキドキを大切にしながら 同じ時間を共有して教師と子どもが同じ発見をし同じ体験をすることができる それが学校での散歩ではないだろうか。

学校の中では決まったパターン 決まった行動範囲になりがちな子どもでも 外という環境の中ではまた違った姿を見せる。それはたぶんに教師側にとっては思いがけないことばかりである。しかし散歩だからこそ見ることができる子どもの姿もある。現在中学部で取り組んでいる散歩においては みんなで歩いている途中での発見や寄り道 友達同士のやりとりといったことも大切な要素と考えている。これらの要素こそが散歩のねらいであるとも言える。たかが散歩と考えるかもしれないが されど散歩と考えていくとより多くの発見が期待できる。

また 散歩について考える場合には立地条件も重要である。本校の場合 近くに兼六園や多くの神社仏閣 古い街並みや老舗といった歴史的な遺産もあれば美術館 博物館といった文化的な施設も多い。また 中心街とはいって一本裏道に入ると静かで金沢の特徴ともいえる複雑に曲がりくねった細い道に出会う。その一方では浅野川や小立野台地 卯辰山といった自然のままの緑豊かな 季節感のあふれるところもある。つまり 大変恵まれた環境であるといえるかもしれない。ただ だからといって街の中の学校がいいなどと論議するのではなく それぞれの学校の立地条件を最大限に活かすように周囲の環境について教師自身が十分に把握していくことが大切であると考える。

(2) 中学部における「散歩」の経緯

中学部では散歩を今年度の研究内容に取り上げたが 散歩に取り組み始めたのは7年前の1988（昭和63）年度からである。散歩によって学校生活では見えにくい子どもの姿を見ることができたり 人や物 自然などとの出会いを生徒と教師が共に体験する楽しみが得られたりすることもあって 特にここ数年は各学年において積極的に散歩に出かけるよう

になり 中学部の教育活動の中では重要な意味を持つまでになってきている。

この背景には 人との関係 仲間との関係をうまく結べない 指示がないと行動できない 自ら周りに働きかける力が弱いなどの生徒が増えたため 教育のねらいや日々の日課などの見直しをする必要にせまられたという事がある。

そこで中学部の集団活動を よりいっそう友達とのかかわりを作り 一人一人が自分を表現できる場として考え 1989（平成元）年度 学部集会「HAPPY TIME（H・T）」を設けた。また「生活」の時間についても内容や時間割りを見直すことにした。やがてそこに「散歩」が登場することになる。

したがってここでは今年度までの〈「生活」と時間割の見直し〉〈「散歩」実践の流れ〉について概括したい。

① 「生活」と時間割の見直し

散歩に出かけるのは主として学級単位の「生活」の時間である。この「生活」は内容的には日常生活学習と生活単元学習・行事学習などの2つに分かれる。この「生活」を1987（昭和62）年度には週7時限から9時限とし（表Ⅲ－1）1時限40分の細切れの時間割ではなく2時限枠を週2回設定した。それは大きな集団の中で周りの人とうまくかかわる力を育てるために 小さな集団即ち学級において教師や友達とゆったりといねいにかかわる体験を持たせ より豊かな人間関係に発展させたいという願いから 時数を増やす必要があったのである。

こうして学級の「生活」でケーキ作り ベランダでの野菜栽培 絵本作り 友達の家の訪問などいろいろな活動が展開された。そしてみんなの中での自分を自覚し 教師の助けをかりながら友達と遊ぶことも上手になっていった。教師も学級の仲間づくりを大切にし生活年齢を配慮した遊具や玩具を置いたり 卓球台を設置したりして 教室環境作りにいっそう目を向けていった。また天気のよい日には散歩に出かけ そのたびに思わぬ子どもの姿に出会い その様子を語り合う中でやがて各学級が積極的に散歩を「生活」の内容に取り入れ 1992（平成4）年度には2時限から3時限枠にした。（表Ⅲ－2）

② 「散歩」実践の流れ

「散歩」以前の時代

本校の小学部では 手をつないで一緒に歩く 自転車を引っ張って歩く など積極的に出かけているが 中学部になると出かける時間は極端に減少してしまう。

しかし例年 年度当初の4月には生徒の実態把握をかねて学部行事として兼六園へ花見に行っている。花見がてら教師全員で生徒一人一人について語り 共通理解を深めあいその後の教育活動にとって意義ある機会となっている。また生徒は新しい友達や先生を迎える緊張しているものの 学校から外へ出かけることで開放感にひたり 本来の姿を見てくれる。中には 白鳥路（遊歩道）の小川に散った桜のはなびらを見つけ「桜の川や」と

表III-1 週時表の変遷

	国語	数学	理科	社会	体育	音楽	美術	職家	生活	養訓	クラブ	全校	中高	部	ゲーム	奉仕	H・T
1985(S.60)	3	3	1	1	2	1	2	2	8/6	0/2	1	2	3	1	2	1	—
1986(S.61)	3	3	—	—	2	1	2	3	7	2	1	2	3	1	2	1	—
1987(S.62)	グループ学習	6			2	1	2	3	9	2	1	2	3	1	1	—	—
1988(S.63)		5			2	1	2	4	9	2	1	2	3	1	1	—	—
1989(H. 1)		4			2	1	2	4	9	2	1	2	2		—*	4	
1990(H. 2)		5			2	1	2	4	9	2	1	2	2				3
1991(H. 3)		5			2	1	2	4	9	2	1	2	2				3
1992(H. 4)		5			2	1	2	3	10	2	1	2	2				3
1993(H. 5)		5			2	1	2	3	10	2	1	2	2				3
1994(H. 6)		5			2	—*	2	3	10	2	1	2	2				4

* 「部・ゲーム・奉仕・音楽」は〔H・T〕にその内容を含むこととなった。

* 「中高」は「中高朝の会」、「全校」は「全校集会」、「部」は「部朝の会」

表III-2 1986(昭和61)年度 中学部時間割
1992(平成4)年度 中学部時間割

1986(昭和61)年度

	月	火	水	木	金	土
学級朝礼						
1	全校集会	中・高朝の会	中・高朝の会	全校集会	中・高朝の会	部朝の会
2	生活	国語	数学	生活	美術	奉仕
3	数学	音楽	職家	数学	美術	国語
4	養訓	体育	職家	国語	体育	生活
給食						
清掃						
5	ゲーム	職家	クラブ	養訓	ゲーム	
6	生活	生活		生活	生活	

1992(平成4)年度～

	月	火	水	木	金	土
学級朝礼						
1	全校集会	中・高朝の会	グループ学習	全校集会	中・高朝の会	中学部集会 (ハッピータイム)
2	グループ学習	体育	生活	グループ学習	職家	生活
3	グループ学習	美術	生活	グループ学習	職家	生活
4	養訓	美術	生活	養訓	職家	生活
給食						
清掃						
5	中学部集会 (ハッピータイム)	音楽	クラブ	中学部集会 (ハッピータイム)	体育	
6	生活	生活		生活	生活	

つぶやくなど散歩が生徒を詩人にもさせる。

このような体験が散歩学習へのきっかけとなっている。

「散歩」へのアプローチ

積極的に教室から外へ出かけるようになった1988（昭和63）年度の中Ⅰ学級ではことばによるやりとりや一定時間着席していることを不得手としたり 友達とうまくかかわることができずトラブルをおこしたりする生徒がいるなど 学級の課題は生徒も教師もお互いに一人一人をどのように理解し 周りとかかわっていくかにあった。そのためには教室の中で「～しなさい」という教師と生徒の関係ではなく 教師と生徒が同じ場に立ち同じ行動を通して向き合うことが必要であると思われた。当時の研究グループの一つ「コミュニケーション」で学んでいたインシリアル・アプローチの中の大人がとるべき基本姿勢としてのSOUL（子どもを黙って観察し理解し耳を傾ける）からこの中Ⅰの散歩はスタートした。

だんだん「わかる」ことの楽しさを追求したのは1990（平成2）年度の中Ⅱ学級である。兼六園周辺の道路が土・日・祝日に一方通行規制となった。路線バスを利用しているN君には一大事である。「バスどこいく？ バスていちがう せんせ いっしょきてください」という帰りのバスを心配する彼の要求を受けとめ一方通行規制になると何がどう変わるのが生徒も教師も実際に確かめようと交差点に出かけた。午前10時前派出所付近は警察官がいつもより多く これから起こるであろうことへの期待感いっぱいに瞳かがやかせる生徒と教師。その光景を想像するだけでもわくわくしてくる。Y先生はこのときのことを次のように報告している。「まるでなぞがとけていくように場面が展開していった。子どもも大人もこの瞬間を共有し いっしょに同じ思いをした。『わかる』ということはこんなにも感動的なのかということを知った。今まで教えるという立場がいかに強かったのかという反省も同時に味わった。子どもと共に感じあえる学習をしたいという思いでいっぱいだった。」¹⁾ 子どもの声をきちんと受けとめ 学級みんなで確かめることを実践したこの散歩は子どもが「わかる」ということはどういうことかを教え 教師のこれまでの指導を振りかえらせる力ともなった。

ただ歩くことから目に見えるものにこだわることで展開した実践例に ガスや下水などの「ふたさがし」から始まり「辰巳用水をたどる」実践がある。ふたにへばりついて水の流れを聞く子どもたち。教師は次の発展として下水処理の学習計画を練っていたが施設見学やその意義などを話しても本当にわかることにつながるのだろうかという疑問があった。「もっと自分たちで解決していくような学習を展開していかなければ子どもたちと喜び合

うことはできない……目で追えるもの……人々の生活のにおいを感じることのできる水」²⁾ そうして行き着いたのが辰巳用水である。辰巳用水は歴史的文化遺産として金沢市民にとって貴重なものであるが、この学級では兼六園に流れ落ちる水から始まり ついには用水の取水口までたどりついた。この間 様々なドラマが繰り広げられたことは言うまでもない。

私たちはこの実践から一つのものにこだわるという視点をもつことと同時に予定された内容に生徒を無理やり引き込むのではなく その時々の問題意識に対して柔軟に対応することの大切さを知った。

散歩学習のまとめとして「ふたさがしの散歩」ではふたをクレヨンでこすりだし 掲示した。「用水をさぐる散歩」ではたどった道に16のバス停を加えたことで 生徒にとっていっそう身近なものとなった。「坂めぐりの散歩」では写真と道標のこすりだしを手作り絵本にした。以後何冊もの散歩アルバムや散歩絵本が各学級で制作された。

以上散歩に取り組むようになった背景や散歩の実践に検討を加えながら紹介してきた。散歩は本来目的のない ぶらりと出かけることを意味していると思われ 教育活動の中に組み込むことにいまだに懸念がないわけではない。しかしことばによるやりとりが多い教室とは違って 外では具体的な行動を通して 人や自然とのふれあいがあり 仲間と共に対象に向かい感動を分かちあうことができるなどをこれまでの実践を通して実感できた。

また私たちは子どもたちが 物質的な豊かさに囲まれながらも 友達と遊ぶこと 家族となごむこと 汗して働くこと 自然とふれあうことなど人間が人間らしく生きることにおいて貧しい状況に置かれていることに心を痛めてきた。それ故に私たちは「散歩」のもつ教育力に期待をかけている。

この散歩を契機に遠足や一泊旅行などの行事も見直した。遠足では卯辰山の頂上めざして各学級 違うルートから歩くことにしたり 一泊旅行では貸切りバスだけでなく 特急電車を利用するなど手作りの良さをできるだけ生かすようにした。

その中で決まった内容に生徒を合わせるのではなく生徒に合わせて内容を決めていくこと 生徒一人一人の気持ちの動きを理解しながらかかわっていくこと 教師も生徒と共に学び自己表現し 新鮮な気持ちで向き合うこと これらを散歩における教師の基本的な姿勢として大切にしていこうと確認し その思いの実現に向けて今日に至っている。

(3) 今年度の取り組み

① 取り組みの実際

今年度も基本的には学級単位で「生活」の時間を使って散歩に出かけた。ただし 常に学級単位ではなく 状況に応じて2学級で行動したり 学部での花見や遠足などの行事をこの散歩の一環として取り組んだりもした。

散歩に出かける「生活」の時間は 現在 火曜日と土曜日に3時限枠で設けられている。もちろん 必ずしもその時間でなければならないというわけではなく 行事などの都合により時間割が変更になった場合は柔軟に別の曜日に振り替え 少なくとも月に2回は散歩に出かけるように配慮した。

また今年度の場合 2年生・3年生の担任のうち一人が持ち上がりであるため 前年度さらには前々年度の実践を踏まえての散歩を考えることができる体制になった。そこで 実践に当っては 年度当初より2人の学級担任の間で 年間のねらいや計画について話し合いを持ち さらには他学年の実践なども中学部内での研究会の時に報告しあいながら それぞれの散歩実践について考えていった。また 生徒と共に作りあげる散歩を目指しど写真での記録をクラスでまとめたり H・T(学部集会)で発表をして他クラスとの散歩の交流を行ったりした。

② 取り組みのねらい

散歩を実践するに当っては 本校中学部の教育目標である

- ・健康・安全についての関心を高め 身体機能および体力の向上につとめる。
- ・日常生活や学習活動の充実をはかり 生活経験に広がりを持たせる。
- ・集団生活のきまりや役割を理解させ 自主性・協調性を養う。

という3つの柱を大切にし それにもとづいて 表Ⅲ-3のように個人と集団の両面において各学年の目標を設定した。また 表Ⅲ-3に重なる形で平成4~6年度のねらいと実践を表Ⅲ-4にまとめた。
(樹蔵千恵子・菅野克也・松本賢二)

表Ⅲ－3

《中学部における散歩のねらい》

下段から1年目 2年目 3年目のねらいを表す

	(集団) ・仲間と共に考える (個人) ・集団の一員として行動する	
	(集団) ・仲間と共に楽しむ (個人) ・自分と他（人・物・場所）との関わりを認識する	
(集団) ・クラスの仲間を意識する (個人) ・自己決定をする		
1年生	2年生	3年生

表Ⅲ－4

《平成4～6年度の散歩の実践》

今年度の中学校1年 2年 3年についてそれぞれ

下段から1年目 2年目 3年目の実践を表す

	平成6年度「一歩一歩 大人になろう」
	ねらい ・みんなで「米」を中心とした散歩に取り組む ・集団の中の自分を意識し 自分の行動を決めることができる 実践（手だて） ・米を育てる一方で田の様子も観察する ・生徒たちだけで出かける
	平成6年度「みんなで出かけよう」
	ねらい ・公共の場に出かけ 雰囲気を感じ取る ・仲間意識を高める 実践（手だて） ・積極的に学校近くの公共の施設に出かける ・手をつながなくとも まとまって歩く
	平成5年度「みんなで散歩を楽しもう」
	ねらい ・学校以外の場でもその場に応じた行動を取ることができるようにする ・クラスの仲間という意識を深め お互いを思いやりながら行動する 実践（手だて） ・行動範囲を広げ 積極的に公共の場に出かける ・できるだけ教師の介入を少なくする
平成6年度「いろいろな道を歩いてみよう」	平成5年度「いっしょに歩こう」
ねらい ・自分のペースを知り 同時に集団のペースも知る ・歩く道すがら起きることを感じ伝える 実践（手だて） ・歩くペースを知る ・歩いている道に意識を向ける ・雰囲気を感じる	ねらい ・友達を意識する ・クラスの集団を意識する 実践（手だて） ・2人ペアで手をつないで歩く ・雰囲気を感じる ・歩きにくい道を歩く
現 1年生	現 2年生
	平成4年度「学校の周りを歩いてみよう」
ねらい ・友達と一緒に歩く ・学校の周囲を探検しながら 友達のことを知る 実践（手だて） ・楽しさを共感し合う ・教師が先頭に立たなくても まとまって歩く	
	現 3年生

2. 各学年の実践

(1) 中学部1年の実践から

① 生徒の実態

このクラスは男子3名 女子4名の計7名である。そのうち4名は本校小学部からの進学であるが 3名はそれぞれ違う学校からの入学である。一学期の頃は中学部の雰囲気になかなかなじめず 一人遊びをしたり 以前いた小学部の教室で遊んだりしていた。二学期になり中学部での生活に慣れ 少しずつ自分を出せるようになると クラスの友達ともかかわりを持てるようになってきた。

また このクラスは体格の差が非常に大きく 入学当初 身長差は45cm 体重差は32kgであった。この体格差もあるだろうが散歩に出かけても体力差があり 7名がまとまって歩くということが難しかった。

② 実態からのテーマ設定

体力差のある子どもたちであること 友達同士のかかわりがまだ希薄であること この二つの実態から 散歩を通して培って欲しいことを次のように考えた。

- ・自分の歩くペースを知り同時に集団のペースも知る
- ・歩く道すがら起きることを感じ 伝える

そこで「いろいろな道を歩いてみよう」というテーマを設定することにした。

③ テーマの考察

登下校の際 バス停まで歩く生徒もいれば 玄関まで送り迎えの生徒もいて 歩くということの経験の差がかなりある。さらに体格の違いは歩幅とも関係し クラス全体で一定のペースを保つということはかなり難しい。

そこでまず 自分自身の持つペースを変える柔軟さを持って欲しいと考え 友達や大人とペアを組んで歩かせた。時にはペースが合わずに引っぱる 引っぱられる関係になり手を離してしまうこともあるだろう。しかし 相手を意識しなるべく長い時間手をつないでいることができれば お互いに妥協できるペースを見いだせるのではないかと考えた。そしていずれ手を離しても 友達の動きなどを意識して全体のペースに協調できるようになることを願った。

また 今どこを踏みしめているのかを足から姿勢からそして目からなど全身で感じ取って欲しい。そのためにもどんなコース（街の中 自然に囲まれた場所 坂道 階段道 悪路等）を選ぶか考慮し そこで一人一人が何をどのように感じているのかを見つめていくことにした。また前述のペアになった友達の様子をお互いに感じ取ることにより坂道や階段道で立ち止まって躊躇しても支え合える関係になることを期待した。

さらに その場の雰囲気というものは なにげなく感じとってはいるが はっきり形となって見えるものではなく 意識的に感覚を働かせなければならない。周りの様子 それ

は景色であったり 空気であったり 音や光であったり 目から耳から時には鼻や皮膚から感じるであろう。そこで感じたことを声や表情で表すこと それを仲間にも伝えようとしてすることを大切にしたい。

散歩を通じ 大人も子どもと同じ状況の中で感じたことを伝え 子どもと共に感し合える関係を大切にし 共に学び合うという姿勢を持ちたい。それが子ども同士のかかわり合いに結びつき 仲間を意識することにもつながるのではないかと考える。

④ 実践例

歩くことに自信がついたY男

Y男はダウントン症候群で肥満である。体を意図的に動かすことが嫌いであるが 休み時間などには友達と鬼ごっこをして遊んでいる時もある。一学期の初めの頃の散歩は 学校を出発する時には友達と手をつないでいるのだが 徐々にペースが合わなくなりずいぶん遅れて一人で歩いていることが多かった。更に少し距離が長くなると「のどが渴いた。」

「お茶が欲しい。」などと愚痴を言い 座り込むこともたびたびあった。また彼は犬が嫌いで 鎖につながっていてもその道を連れなかった。そんな彼に 彼が下校時に利用するバス停（肥満解消のために3つ先のバス停まで歩いている）まで道案内をかねて先頭を歩いてもらつた。彼は「ぼくがみんなを連れて行くんだ。」という意識と 通り慣れた道という安心感で 今までにない速いペースでにこやかに歩いた。またその帰りは 彼の自由な選択で道を選びみんなをつれて学校に帰ってきた。この日以来 彼の散歩の仕方が変わってきた。いつもクラスの最後尾を歩いていたのに みんなと一緒に会話を楽しみながら歩けるようになり「お茶。」などと愚痴を言うこともなくなった。そして嫌いな犬に出会うと しばらくその場所から動けないのだが そのうちに回り道をするなど自分で判断するようになった。

肥満で歩くことをあまり得意とせず どちらかというと散歩に受け身で参加していた彼が このようにみんなと一緒に行動できるようになったのは 先頭を歩くことで集団を引っ張るという主体的な行動を体験できたことが大きくかかわっているように思う。またそのことが犬と出会っても 犬のいない道を選ぶという問題を解決する力につながったのではないだろうかと考える。



4月 「わっ！ 犬だ」

歩いている道の状況を楽しむO子

他校より入学のO子は 登下校が車での送り迎えである。彼女は体が小さく 歩く時には手でバランスを取らなければならず クラスの他の生徒よりも歩くことを得意としていない。また 指示待ちの場面が多く 自分から行動することも少ない。散歩に出かけても街中や坂道では必ず誰かと手をつないでいるか 大人の服をつかんでいる。道が急坂になっていたり長時間歩いたりすると泣き出し 抱っこやおんぶのサインを出してくる。そんな彼女だが クラスや学校周辺がわかってきた頃から変化が出てきた。交通量の少ない道では誰にも頼らずに歩くことができ さらに急坂や階段などでは一度立ち止まるが 一人で上がるようになったのである。そして何回か通った道では 歩いている状況もわかるようになり 砂利道の小石や落ち葉の上など足で踏みしめる感触や その時に生ずる音を楽しみながら歩くようになった。

4月から本校に入学してきた彼女にとって 未知の場所に対し強い不安を抱いていたことと思うが 徐々に散歩にも慣れ 一人で行動できるようになってきた。また 階段などで躊躇して立ち止まても 声をかけたり待っていたりなどみんなの支え合いで彼女もそれに応える関係ができはじめている。そして今では友達と離れ一人で歩くことになっても 彼女なりの散歩を楽しんでいる。

友達の世話をしたがるH子

H子は 前述のO子の世話をとてもしたがっている。彼女は一学期の半ばぐらいから散歩に出かける時には O子と一緒に手をつなぎ 「きれいいやねえ あそこ見て」などと話しかけていた。しかし 彼女にとっての散歩は周囲の景色や変化を楽しむというよりも O子の世話をするために 足元を気にし過ぎるという感じが強かった。二学期になり ある日「秋を見つけよう」という目的で学校周辺を散歩した時のことである。秋の草花やきれいな落ち葉を拾い集めるために 一人一人にナイロン袋を持たせた。彼女は落ち葉を拾うこと熱中するあまりO子のことは忘れてしまったかのように手を離した。この時から散歩に出かけると 自分から木の実や色づいた葉を見つけ 拾うようになった。また それをO子だけではなく 他の友達にも声をかけ 一緒に見たり見せ合ったりといったかかわりを持つようになった。

彼女にとって 散歩が世話をする場となってしまい 本来の感受性豊かな面が表出されにくかった。しかし 興味のある落ち葉拾いなどを自由にできたことが 散歩を楽しむことにつながったのだと思う。また 散歩の経験から 登下校でも周りに目が向くようになり それを楽しんでいるようだ。

彼女は下校途中でもきれいな落ち葉やコスモスを持って帰り 母親に見せている。その心の動きを 母親は次のように受けとめている。

連絡帳より

10月25日（火）きのう制服のハンカチの間から秋桜の花がでてきました。うすいピンク色で 小さめの花です。おとめ心の芽ばえかな。

11月2日（水）カバンのポケットの中から落ち葉がいっぱい出てきました。きれいだなと集めているうちにいっぱいになったようですね。

仲間を意識し始めた中Ⅰ

秋晴れのある日 金沢城址に出かけた。ここは金沢大学の校舎移転にともない現在は閑静な森という感じがするところである。車の心配もなく また人もほとんど通らず我々だけで紅葉を楽しんだ。一学期の頃は散歩に出ても先にさっさと行ってしまう生徒や ずっと後からついてくる生徒 そんな事はおかまいなしにおしゃべりに夢中になる生徒などばらばらだったこのクラスだが この日は 遅くなった友達を待とう 先を歩いている友達に対し待ってと呼びかけるなどと集団を意識する行動が出てきていた。さらにきれいな葉や何かを見たら「見てこっち来て」とみんなに伝えようと大きな声で呼びかける生徒もいた。

また 近くの浅野川に出かけたときには 出張で一緒に行けなかった担任に その時の様子を知らせたくて 後で一生懸命に話しかけていた。

⑤ まとめ

散歩を通して一人一人の子どもの姿をみることができたが 必ずしも7名について深く知ることができたわけではない。子どもによっては相手に自分の気持ちを伝える力がまだ弱く 自分一人だけの楽しみに終わってしまっている。しかし さまざまな場面で どうしたら良いかと迷ったり 喜びを感じたりすることを重ねていくことで 個人の精神面の成長があったであろう。また それを転機にその子の持つ世界が広がっていったことは確かである。

一人で出かけるよりは仲間と出かけることが楽しいのは子どもも大人も同じである。今年度はできなかったが 今後は大人が介入せずに子どもだけで散歩のコースを決め そこで起きることを みんなで解決しようとする場も考えていきたい。さまざまな冒険をして よりいっそう仲間と楽しさを共有することができるだろう。

(能岡晶子・中川博俊)

(2) 中学部2年の実践から

① 生徒の実態

中学部2年生は男子6名 女子1名で構成されている。ことばによるやりとりがあまり活発ではないが いっしょに1年間を過ごし 友達への理解や仲間意識が深まってきている。

また中学2年生という時期を迎える自我が確立し 自己主張が強くなってきている。さらに思春期特有の身体的変化も現れ 情緒的に不安定になったり 自分の世界を他から干渉されることに強い抵抗を示したりする生徒が多い。したがって まわりと協調したり集団に参加したりする場面において 自ら納得して自己決定し 行動に移すことに大変時間を要する。

② 実態からのテーマ設定

1年生の最初の頃は どれくらいの距離を歩き 何をしてくるのだろうかという見通しを持てない不安がつきまとったに違いない。しかし 散歩を継続していくにしたがってその内容を理解できるようになり 見通しが持てるようになってきた。それは外に出かけることで気持ちが開放されると同時に ドキドキわくわくする場面にも出会うことを知ったからと考えられる。

はじめての道を歩いたり はじめて会った人に話しかけたり 通りすがりの人においさつをしたり 緑の芝生の上に寝ころんで青い空をながめたり 雪が積もった町中で自分たちのゲレンデを探して滑ったり 生徒たちは楽しい経験をたくさん積んできた。その中で自己決定の場にもたくさん出会ってきた。みんなといっしょに行動すること 山道や崖の登り降り 川遊び等 戸惑ったりしりごみをしたりしながらも 生徒自身で決定する場面もたくさんあった。これらの経験が生徒たちの心を揺り動かしたと思われる。

そして 今年度は自然との関わりの中で培ってきたことを大切にしながら 外界との関わりが多くなるところへ出かけ その中の自分の心や仲間を意識させたいと次のねらいを考えた。

- ・公共の場に出かけ雰囲気を感じる
- ・仲間意識を高める

そこで「みんなで出かけよう」というテーマを設定することにした。

③ テーマの考察

病院・市場・デパート等 様々な施設や場所に出かけることによって 生徒たちは何を感じるのだろう。それぞれの場にある独特の雰囲気の中に自分を置くことによって「どんな所なんだろう」「どんな行動をとるべきか」「こんなところは嫌だ。早く出ていきたい」など 自己の世界から 他の人・物・場・時といった状況に対してそれに違った感じ方をしているに違いない。このような互いの感じ方を知ることによって いっそう友達へ

の理解を深めさせたいと願った。

また 1年生の頃の「仲間を意識する」というねらいに加えて 今年度はいろいろな場に出かけ その出かける過程や目的地に着いたその場所で「仲間と共に楽しむ」ということができればと考える。そのために 大人も子どもの立場・子どもの視点に立って散歩を共有していきたい。

④ 実践例

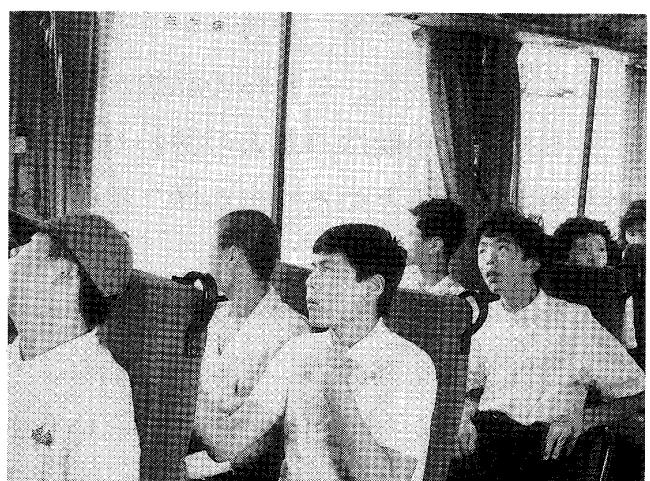
病院へのお見舞Ⅰ

6月 担任に赤ちゃんが誕生した。生後間もない赤ちゃんを見せたいという思いと 病院という独特の雰囲気を感じ取るいい機会になるということで 病院へのお見舞に出かけることになった。初めての病院だったが 一步足を踏み入れた途端 どこか違う雰囲気をそれぞれに感じ取ったようだった。いつもは教師に大声で話しかけたり ふざけ合ったりする生徒が黙って教師の後をついてきたり 窓越しに赤ちゃんを見せてもらう時も遠慮がちに照れくさそうにしたり 教師の問いかけにも小さな声で答えたりしていた。彼らなりにその場を認識し 場に応じた行動をとることができており 一人一人を見直す機会となった。

しかし 原因はよくわからないが K男が友達の手にかみつくという行動に出てしまった。初めての場所になかなかはじめないK男にとって 病院という場の緊張感に耐えられなくなったのかもしれない。改めて 指導の難しさを感じた。

病院へのお見舞Ⅱ

9月に入ってクラスのI男が 虫垂炎で手術。しばらく入院生活を送ることになり お見舞に行くことにした。今回は学校から少し離れたところなので市内バスを利用することにした。病室の中に入るということで 担任以外に養護教諭にも引率に加わってもらい 生徒6名と教師3名で出かけた。市内バスには2年生になってから何度か乗っている。最初の頃は他の乗客にさわったり大声を出したり お金を持ったまま降りたりと本当に生徒



市内バス乗車中

も教師も気を張り詰めての乗車であったが 回を重ねるごとに上手に乗ることができるようになってきている。この日もバス停や車内で落ちついて行動することができた。やはり経験を積むことが大切である。道すがら久しぶりに逢えるI男のことを話しながら病院に向かった。病院に入ると全員が静かに廊下を歩き 生徒たちにとって初めての病室に入っ



I 男の病室にて

た。そこは2人部屋でI男が寝ていた。S男はにこにこ顔で歩み寄ってI男と握手し I男の足をなでていた。U男は養護教諭につかまって手を差し出し I男と握手した。I男が普段とは違うことを感じ取ったA子は「I男起きなさい」と思わず話しかけた。なかよしのY男は握手してしきりに話しかけていた。K男は教師の声かけでそばに寄っていってI男と握手した。そして一人でとなりのベッドのおじいさんのそばを通って窓際へ行き 外

を眺めて静かに“お見舞”が終わるのを待つことができた。M男だけはほとんどI男に関心を示さなかったが 奇声をあげることなく黙って座っていた。それぞれがその子なりに久しぶりに会うI男への思いを感じ取って表現している姿に接し その子らしさをしみじみ味わった散歩であった。

雨の日 デパートへ

12月中旬の雨の日 クリスマスカードを買いにデパートへ行くことになった。デパートまでは徒歩で片道約30分の道のりである。これまで人混みの中を行くときはペアになって手をつないでいくことが多く ペアの友達だけを意識していればよかった。しかし雨のため一人一人が傘をさして歩くことになり 一人で行かなければという不安から みんなを意識せざるを得なくなり その結果誰一人遅れることなく ひとかたまりになって歩いていくことができた。思わぬ雨の日の成果である。

そればかりか いつも最後尾を遅れがちに歩くU男が 遅れて渡った横断歩道で赤信号になり クラクションを鳴らされてしまった。U男はそれ以降 自分から集団の真ん中に入り込んで みんなといっしょに歩くようになった。これまでには見られなかった光景である。

デパートで好きなカードを買って帰途についた。帰り道という安心感からか Y男とI男がしだいに集団から離れ 先へ先へ急ぎだし 2人だけ交差点を左に曲がってしまった。教師が呼び止めると I男が振り向き 集団にもどってきたが Y男は振り向きもせずどんどん先へと進んでいってしまった。



傘をさして歩く

もうそこは学校からも近く 散歩でもよく歩いた道である。そこで他の生徒を違う道から学校へと向かわせ Y男はそのまま一人で行かせることにした。そして 教師が一人後からそっとついていくことにした。300~400mはまったく後ろを気にすることなく歩いていたY男が 階段の所で振り向いた。そこで初めて後ろには誰もいないことに気づき ぼう然とする。2~3分じっと待っていた。でも誰も来ないので しかたなく一人で学校へ向かう決心をしたらしく とぼとぼと歩きはじめた。時々後ろを振り向き またあきらめてうつむきがちに歩いていった。無事学校が見えたとき 違う道から学校に帰ってきた友達と一緒になり 緊張していたY男の顔に笑顔が見られた。

みんなと離れ 一人きりだと気づいた時 一人で行かなければと決心した時 そして一人で学校にたどりつけた時のY男の心の中は どれほどのものだっただろう。この経験から Y男は一人でも学校に帰ってこれるという自信ができた。しかし この後も先頭に立つとみんなを待たないで 自分だけのペースで歩いてしまうという問題が次に出てくる可能性がある。また Y男が一人で行ってしまったときに 誰も呼び止める仲間がいなかつたことをきびしく受け止め 今後の課題としたい。

⑤ まとめ

学校周辺では 春には華やかな桜を見て 夏には新緑の息吹を感じ 秋には色彩鮮やかな樹木の中を歩き 冬には一面の銀世界とたわむれることができる。この四季折々の景色や薫りを一人で味わうのではなく 友達同士で味わい共感し合う。これがクラスの散歩の基本のような気がする。これらのこと 教師が教室で言葉によって伝えようとしても 到底伝えきれるものではない。生徒自らが体験することで 本物が教えてくれるものである。たとえ 散歩が自然から公共施設へとその対象が変わったとしても 周りから受ける影響を共に感じ 共に確かめあっていくことにおいて 同じことが言えるのではないだろうか。

今年度は病院 デパートのほかにも 図書館 高校の文化祭など それぞれ独特の雰囲気をもつ場所へ出かけた。その中で生徒一人一人は本物の空気に触れて 自ら考え方行動を起こし 色々な出来事に出会った。その出来事から 私たち教師は生徒の生の思考 生の行動をどう受け止め どのように返していくか それが大切だと考えた。これらの諸場面において ものの見方や考え方 行動の処し方などを学び合うことこそが 散歩におけるねらいであり その積み重ねから 次の散歩へと発展していくと考えるのである。

(今 井 康 弘・近 藤 明 子)

(3) 中学部3年の実践から

① 生徒の実態

中学部3年生は男子3名 女子4名で構成されている。会話としてやりとりのできる生徒もいれば 言葉でコミュニケーションをとるのが難しい生徒もいる。また体力的な面でも個人差が大きい。しかしクラスの中の一人として互いを意識し合い みんなで活動に取り組み楽しむことができるようになってきている。

② 実態からのテーマ設定

今年度の中Ⅲの散歩を考えるとき やはり3年目であるということを大切にした。同じ顔ぶれで中Ⅰ 中Ⅱと散歩を経験していることは テーマを考える上で非常に大切なこととなる。この2年間の散歩のテーマなどについては表Ⅲ-4にまとめてあるが これを踏まえた上で今年度の中Ⅲの散歩について考えた。

中学部の3年ともなると入学した当初に比べると その体格をはじめ 判断力 決断力 行動力 クラスのまとまりも大きく変化し 時として意外な成長に教師が驚かされることがある。特に散歩の中でその成長をより顕著に見ることができる。散歩に出ても教師が不安になることが少なくなり 余裕が生まれ 散歩の中に緊張の場や冒険の場を設けることができるようになってきている。そこで 中Ⅲの散歩ではこれまでの2年間の積み重ねを考慮し次のようなねらいを立てた。

- ・みんなで‘米’を中心とした散歩に取り組む
- ・集団の中の自分を意識し 自分の行動を決めることができる

そこで 中学部の最高学年であるということも考えて 今年度は「一歩一歩 大人になろう」というテーマを設定した。

③ テーマについての考察

中学部の最上級生として 下級生のリーダー的な役割も担っていかなければならない 中Ⅲの子どもたちに 今身につけて欲しいことを散歩のテーマの中に考えてみた。

2年生までの散歩では 毎回教師の方から課題が与えられるということが多かった。しかし 子どもたちが自ら考え主体的に行動できるようになってほしいという願いから 今年度は子ども同士で課題を見つけたり 周りの状況などから解決方法を考え実行したりできる散歩を経験させたいと考えた。もちろんそれは 簡単なことではない。しかし年間を通して‘米’という視点を持った散歩に取り組むことや 教師がきっかけやヒントを与えることにより できるだけ 子どもたちが自分の力を發揮し 自分たちの力で何かができるという場を設けていきたいと考えた。

また これまでどちらかといえばクラスとしてのまとまりや集団を意識するということを目的とした散歩が多かった。しかし 中Ⅲになると集団の中にいる自分を意識しはじめ その中で自分はこんなことをしたいという気持ちが育ってくる。それは決して自己勝手な

意識ではなく集団の中の ある役割を持った自分として 何かをしたいという気持ちの表れでありこのような個の自覚をいっそう育てていきたいと考えた。

以上のような散歩を積み重ねることを通して 自己を素直に表現し 豊かな自己の実現につなげ やがては豊かな心と豊かな生活ということに結び付けたいと考えた。

④ 実践例

米を中心とした散歩

子どもたちは ほぼ毎日ごはんを食べている。しかし ごはんはどのように調理されているのか 米はどこで作られているのかなどといったことを理解している子は少ない。また今年（1994）の4月頃ちょうど輸入米がニュースとなっており テレビや家庭で米に関する話題を子どもたちも耳にすることが多かった。そこで 年間を通しての「生活」で「米」について取り組むことにした。

教室横のベランダで実際に米を育て ‘米’ の成長の観察をしながら興味をもたせていった。その一方で 散歩においても ‘米’ という視点を持って出かけて行き 水田の稲が育っていく様子を目で確かめ 新しい発見をさせるようにした。

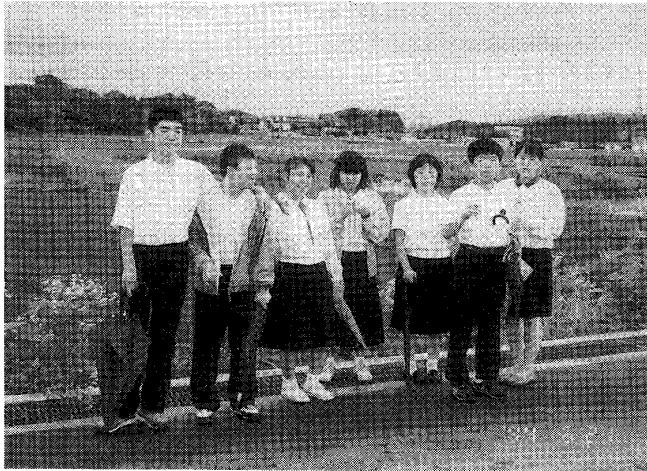
具体的には次のような点を大切にしていった。



教室での米作りのようす

- ・人との出会い
散歩の途中で出会った人と交流する
- ・子ども自身の発見
‘米’ に関するなどを 子どもたち自身が 歩いていく中で発見する
- ・いろいろな道
細い畦道 稲を刈った後の田 などを 足で踏んで感じる

当初はテーマが教師からの提示であったため あまり乗り気でなかった生徒もあり 散歩に出かけても ただ道を歩いているだけであった。しかしそのうち 思わぬところに田を発見しそれを報告する生徒や お米屋さんを見つけ入りたがる生徒などが出てきた。また稲の様子を見る子どもたちの様子も変わってきた。「学校と一緒に」「でっかいい」「うちの近くの田んぼもね…」などと話しかける子や稲をそっと触ってみようとするなどの姿が見られた。そういう子どもたち一人一人の視点の違い 受け止め方の違いを再認識する場面が多くあった。



郊外の田んぼに散歩

ていく中で 生徒達の ‘米’ に対する関心が深まっていったと思われる。

‘米’ という視点があるので目を向けるものがはっきりとし 生徒からの話題が豊富になり行動が積極的になったのではないだろうか。自らの発見が増えると次第に ‘米’ に対する興味も高まってきた。学校でも進んで稲の世話をしたり 登校中に見た田の様子を話してくれたりするようになってきたのである。

毎日食べている ‘米’ を自分たちで育てたこと。散歩に出かけていろいろなものを見ついたことなど学校の内外で ‘米’ を中心に見

教師のいない散歩

この日は 生徒たちだけで ドーナツとジュースを買うという目的をもって散歩を行った。いつも遅れがちなF男やT子もこの日は張り切っており 普段より速いペースで歩いていた。途中 生徒たちは担任が予定していたコースからどんどんはずれていった。しかしあえて教師は姿を現さず そのまま後ろから着いて行き様子をうかがった。

しばらくすると このクラスの中では体力があまりないT子が疲れて座り込んでしまった。やさしく声かけをする生徒 背負ってあげようとする生徒 全ての生徒が立ち止まりT子を見守っていた。結局彼女はしばらく背負われた後で 再び自分で歩き始めた。

この時の生徒たちは 今起こっている事態に対して 自分は何をすればいいのかを考え行動していたのである。いつも先頭を歩き立ち止まることが嫌なS子も この時は穏やかな表情をして待っていた。今自分はこの集団の中の一人として 待たなければならぬと自分自身が納得しての行動であったからだと思われる。それに T子がいつもより立ち直りが早かったのは 教師と一緒にいるときよりも 教師のいない今 自分で歩かなければならぬ 友達に迷惑をかけてはいけないという思いが強かったからではないだろうか。

また この日先頭を歩いていたU男は いつもは一番後ろを歩いている生徒であった。彼は自分が最後を歩くことで 一番遅れている生徒を気づかっていたのである。しかし この日は先頭を歩いた。みんなをリードしなければならないという思いをもっていたようである。絶えず後ろを振り返って全体を見渡しながら先頭を歩くU男は リーダーとしての自覚をしっかりと持っていた。この後教師は生徒たちの前に姿を現したのだが その時の子どもたちの表情は緊張が解けてほっとした表情と ここまで自分たちだけで来たことへの自信があふれていた。

この 教師のいない散歩によって 担任もよりいっそ子どもたちに対する信頼が増し

た。この散歩のことを学級通信で親に知らせたところ『この3年足らずで 一つの輪にまとまり 友達をいたわり 話し合ったりとか なにかほのぼのとした大人への一歩を感じました。』『先生方は思い切ったことを考えると驚きました。でも子どもたちには大切なことなんですね。』という感想が翌日の連絡帳に書いてあった。子どもたちだけでなく教師もそして親もこの散歩を境にして大きく成長した子どもたちに気づき 子どもたちへの信頼や愛情を深めた そんな感動的な散歩であった。

⑤ まとめ

現在は心身ともに大きく成長し 頼りになる3年生たちも 1年生の頃はまだ子どもという感じであった。1年の一学期は 学校の周辺をいろいろと歩いたのだが 子どもたちはそれぞれ自分の思いで行動し 決してまとまりがいいとは言えない状態であった。学校から一歩外に出ると そこにはいろいろなものがありできごとも起こる。学校の外といふのは子どもたちにとって気持ちが開放される場所であり 同時に緊張する場でもある。あれを見たい あっちの方に行ってみたい 初めてのところだ 不安だ もっと歩きたいもう疲れちゃった 散歩の中で子どもたちが感じていることは様々である。散歩を始めた頃まとまりが見られなかったのは それぞれの思いのままで行動していたからである。

しかし 散歩を続ける中で 共通の体験を持ち お互いに共感しあう その積み重ねから仲間意識が芽生え 集団の一員としての自分の役割を意識できるようになってきたように思われる。その一方で 一人一人が見たこと感じたことを認め合い 大切にすることの積み重ねが それぞれの個の豊かさにもつながっていくと言えよう。

散歩から始まった中学部の「生活」であったが今ではもう決して散歩にとどまらずに学校生活全般において その他 様々な場面において一人一人の個性が光るようになってきた。しかし これで十分というものでもなく生徒たちにはこれからも常に考え 行動し発見をしながら 成長を続けていって欲しいと考えている。

(菅野克也・森佳子)

3. まとめ 「子どもの視点・大人の視点」

これまで 散歩についていろいろと述べてきた。率直に言えば この散歩への取り組みは中学部の子どもたちにとって 体力面 精神面 コミュニケーションの面などいろいろな面において有意義な取り組みだと考えている。そして この散歩の実践を通して最も大切なことと確認されたのが「子どもの視点・大人の視点」ということである。

外に出かけると 大人は大人の視点で 子どもは子どもの視点で周りを見ていることに気づかされる。大人は教育的配慮で 季節を感じさせるような出会いを求めていることがある。また 地形や学校周辺の地図を意識して道を選んでいることがある。教師の側に

立っての散歩では確かにそれは大切なことであろう。しかし子どもにとってはどうなのだろうか。急な坂を歩いたり 古い街並みを歩いたりすることが子どもにとって本当に楽しいことなのだろうか。教師側の自己満足であり ただ子どもたちを連れ回しているだけではないかという疑問がでてくる。果たして 子どもの知的欲求 感覚的な欲求を満たしているのだろうか。

大人の思いは子どもにとって二次的なものであって 決してそれが主な視点でないことがある。教師の気づかないことを子どもが見ているということにしばしば気付く。例えば大人は「いい景色だねー」と遠くの景色を見ていても 子どもはその中から小さくしか見えない看板を見つけて喜んだり また 文字・記号や路線バスを見つけて喜んだりする。さらには 大人がもう感じることのできなくなった 風や木の葉のゆらぎを感じているとしか思えないような様子を見せる子 誰かれとなく声をかけて人との関係を喜ぶ子もいる。

子どもの視点から散歩をみると 21人それぞれの視点がある。そこで教師自身が散歩をどのようにとらえ 散歩に何を求めているのかが問われることになる。その子一人一人の課題を見つめて 一人一人を教師がどれだけとらえているのか。学年のねらいや個人のねらいをしっかりとつかみ そして 何をこの子どもたちに発見させたいのか感じさせたいのか ということを十分に教師が把握していかなければならない。そのためには まず散歩に出て子どもたちの姿をじっくりと見ることが大切である。どんなところで子どもたちが目を輝かせ 言葉を出し 怒って 笑って 嫌がっていたのかを手がかりに一人一人をしっかりととらえ 一人一人の目標を念頭に置かなければならぬのではないだろうか。このことは 散歩はもちろんのこと 学校生活全般においても重要なことと言える。

子どもの豊かな成長を願うときに決して欠かすことの出来ない教師の指導の視点を この散歩の実践の中で確認できたことが 今年度の研究の中での大きな成果である。

中学部における「豊かな心と生活」は やはり友達同士や中学部全体の響き合い ハーモニーの中から生まれるものではないだろうか。中学部という集団の中で 一人ではなくみんなの中で 心をつくり 体をつくり 友達とかかわる喜びを味わう それが子どもの中で大きなゆとりとなる。そしてまた 散歩を通して出合わせたい風景・人・物・事・場所などがある。その中で子どもたちの誰もが持っている好奇心や探求心を搖さぶることよって知的欲求 感覚的欲求を満たし 子ども自らが主体的 積極的に生活できるようになる。それが「豊かな心」「豊かな生活」につながると考える。

(菅野克也)

引用文献

- 1) 能岡晶子 実践記録「水にこだわる学習」 1990
- 2) 竹田契一 里見恵子他 「インリアルアプローチ」 日本文化科学社 1994

参考文献

- ・金沢市文化財紀要104 「金沢歴史のまちしるべ案内」 金沢市教育委員会 1992
- ・金沢市文化財紀要84 「金沢市の指定文化財」 金沢市文化財保護審議会 1991
- ・かつおきんや 「天保の人びと」 偕成社 1984
- ・カロリン・シェーファー／エリカ・フィールダー 「シティ・サファリ」 都市文化社 1989
- ・おおきなポケット 4月号（第13号） 福音館書店 1993
- ・平澤 一 「卯辰山と浅野川」 1993